



関東実業団剣道連盟 会長

松^{まつ}村^{むら}建^{けん}世^せ

「剣道に魅せられて」

長年剣道を続けている人のうち、何らかの事情で中断を余儀なくされた人も多いと思います。私の場合も2度の中断がありました。

生まれ育ちは能登半島の突端にある輪島市です。高級漆器の産地として少しは知られている町ですが、辺境の地であることに違いありません。

中学1年の時に、先輩たちが県大会の団体戦を初めて制したことに刺激を受け、剣道を始めました。地元の篤志家で熱意のある方の指導のお陰で、望外にも県大会の個人戦で優勝した事もあって、高校入学時には当然剣道部に入りました。

一方で塾も無い土地柄、受験勉強は自分で計画を立てて実行して

いかねばならず、結局両立を断念し、早々に退部を申し出ざるを得なくなりました。文字通りの三日坊主でした。

大学ではブランクを取り戻そうと、まずまず稽古に出ていました。が、お粗末なことに交通事故に遭い、医師から「当分剣道は不可」との指示を受けてしまいます。2度目の中断です。

社会人になってからも剣道とは無縁の生活でしたが、30歳も過ぎた頃、偶然にも道場が近くにある家に引っ越しました。門弟募集の貼り紙を見てみると、京大時代に師範の齋藤正利先生（範士九段）から戴いた「君は存外筋が良いから剣道を続けなさい」という言葉が忽然として思い起こされ、再び竹刀を手にするようになります。「人は褒めて育てる」この意味

を肌身で感じました。

初段しか持っていなかった身として「段本位制」とも言うべき剣道界のシステムの下では、正に最下層からの再開でしたが、以来40年近く、転勤先でも剣友会に入れて戴くなどして細々ながら途切れることなく稽古を続けています。恵まれた環境に感謝です。

段と言えば、私が全剣連の総務委員をしていた頃、七段の質的バラつきに鑑み、その位置付けを「六段の上ではなく、八段の手前」とする考え方が論議され、結果として合格率が5パーセント程度になるまで審査が厳格化したことがありました。剣道愛好家からの評判はどうだったのでしょうか、今では景色が大きく変わっています。

最近では人口減少を乗り越える役割を期待される女性と高齢者にスポットが当てられ、その特性に配慮した運営がなされています。高段位の権威を保つことは剣道界の秩序形成に大きな意味があります。私たち一般の剣道人も「剣道の技術的力量」を多面的・複合的に捉える目を養うことが、こうした運営の定着を担保することに繋がるのではないかと思います。

ところで、縁あって横浜市の公立中学で4年前から週3日程度、

部活動指導員を務めています。入部してくる生徒の多くは、全くの初心者で身体能力もマチマチです。なかなか思うに任せませんが、剣道の奥深い魅力を伝えつつ、生徒が卒業していつの日か剣道に戻った時に、十分適応できる基本をしつかり身に付けることを主眼に、辛抱強く取り組んでいます。

その部活動が今、少子化・指導者不足・教師の過重な負担などを背景に、地域への移行が推進されるという歴史的転換点を迎えるようとしています。財源・指導者・施設の確保を始め、家庭の経済的負担など多くの解決すべき課題があるとされていますが、土・日はともかく平日までもなると、より大きな困難が伴うことが予想されます。中学生の部活動全般における圧倒的熱量をきちんと受け止め、健全な育成に資する受け皿を、あくまでも『生徒第一』を中心に据えて構想してもらいたいと願うものです。

剣道界としても、こうした動向を注視し、将来を担う中学生の剣道人口の確保という観点からも、それぞれの地区における組織的対応を加速することが求められているのではないかと感じています。

（剣道教士七段）